赤ちゃんの四季（52）　平成26年冬

生まれつきもつ“まなかい”能力を損なわないように

驚くべきことに、生まれて間もない赤ちゃんの目の前で、大人が舌を突き出したり、口を開閉しながら微笑みかけると、赤ちゃんもこちらの表情を鏡に映し出すようにまねをします。ヒトの新生児は、他の哺乳類と違って、自力で母親にしがみついていられないし、母親の手助けなしにおっぱいを飲むこともできません。誕生した時から、他者、母親の関心を引き、世話をしてもらわないと生きていけないので、表情の模倣という行為が、生得的に備わったと考えられています。

育児の神様ともいわれる小児科医内藤寿七郎先生は、「育児の基本は、“まなかい”にある。」と絶えず話されていました。広辞苑には、まなかい【目交ひ／眼間】とは、目の目の間、目の前と記されているだけですが、先生は「目と目が合うこと」、アイコンタクトの意味で使っておられます。私は、この「まなかい」という言葉が大好きです。単に目と目とが合うというだけでなく、見つめ合いや微笑を通じての母と子の「快の情動」が、周りの人にまで伝わってくる響きがあるからです。

発達障害の代表ともいえる「自閉症」で最初に現れる症状が、この“まなかい”の欠如です。今年11月刊行の科学雑誌ネイチャーに、Jones及びKlim博士らが発表した論文が大変注目されています。自閉症の兄姉を持つために自閉症スペクトラム障害になるリスクが高い幼児を対象に、“人の目を目で追うという行動”を観察し続けていると、2～6月齢から低下し始め、24か月では低リスクの幼児の半分程度に低下したそうです。この行動観察を続けていると、早い時期に自閉症のリスクを見いだし、治療介入の機会が得られるのではないかと述べています。

疾患があろうとなかろうと、ヒトとして生まれつき備えているこれらの機能を損なわないようにすることです。幼少期から他者と“まなかい”を通しての行為を共有する育て方をすれば、人間としてのコミュニケーション能力が高まり、大人になってもあたたかい人間関係を築けることでしょう。